

歴史地理学からみた寺内町の性格

一 八尾の三つの寺内町を比較して一

金 井 年

一、研究目的および三寺内町の概略

大阪府下の諸都市の中には寺内町を核として発展したものがかなりあることは周知の事実である。しかもそれらは大なり小なり近代以前の形状を現在に伝えるものが多く、藤岡謙二郎氏は現景観の中に寺内町のかつての性格を見いだしている⁽¹⁾。本稿は八尾市の、歴史的核⁽²⁾である久宝寺・萱振・八尾の三つの寺内町を取りあげ、都市プランや住民構成などの観点から検討を加えようとするものである。

なおこのうち八尾、久宝寺については既に郷土史家、沢井浩三氏の研究があり⁽³⁾、それによって両寺内町の成立から近世における展開までを概観することができる。そこでまず同氏の論文および『八尾市史』等を参考にこれら寺内町の概略を記してみることにした。

文明二年(一四七〇)、河内に布教した蓮如上人は「帰者如市」といわれるほど多くの信者を獲得し、また土豪畠山氏とも結んで久宝寺寺内町を建設した。萱振についても、信徒の強い要請によって町がつくられたといわれている⁽⁴⁾。他方八尾は江戸時代に入ってから、

本願寺の分派の際に西本願寺方についた久宝寺御坊に対して慶長十一年(一六〇六)、東本願寺を支持する森本七郎兵衛ら十七人を主導者とする一部住民が町の東、大和川(つけかえ前の)を挟んで反対側の地を新しく開拓してつくったとされる。このように久宝寺、萱振と八尾には一四〇年ほどの建設時期の違いがあり、その間に寺内町というものの性格も変化していた。即ち前二者が典型的な環壕城塞都市であるのに対し⁽⁵⁾、八尾は当初から在郷町としての性格を有しており、防御の意味は稀薄であった。

その後の変遷過程においてもこの三つは相違がみられる。久宝寺、萱振は都市としての発展を充分にみなかったのに対し、八尾はこの地域の中心地として繁栄するに至った。久宝寺の場合、江戸初々中期頃までは商業町として栄えていたが、大和川つけかえ後は流水の減少によって舟運に支障をきたし、そのために町は衰微して代って八尾が発展してゆくのである。

以上のような町の性格の相違を先述のような観点によって明らかにするのが筆者の意図するところであり、そして叙述の順序としてはまず、寺内町の外部形態を大まかに把握し、次に内部構造をミクロに考察することとする。なお町のスケールについてふれておくと、久宝寺と八尾はほぼ四町四方、萱振は南北約四町、東西約三町で三つとも、ほぼ同じ大きさである。したがって人口その他についても同じレヴェルにあるものとして比較することができる。

二、寺内町の立地条件と条里制

町の立地の自然条件としては三つの寺内町がいずれも自然堤防上

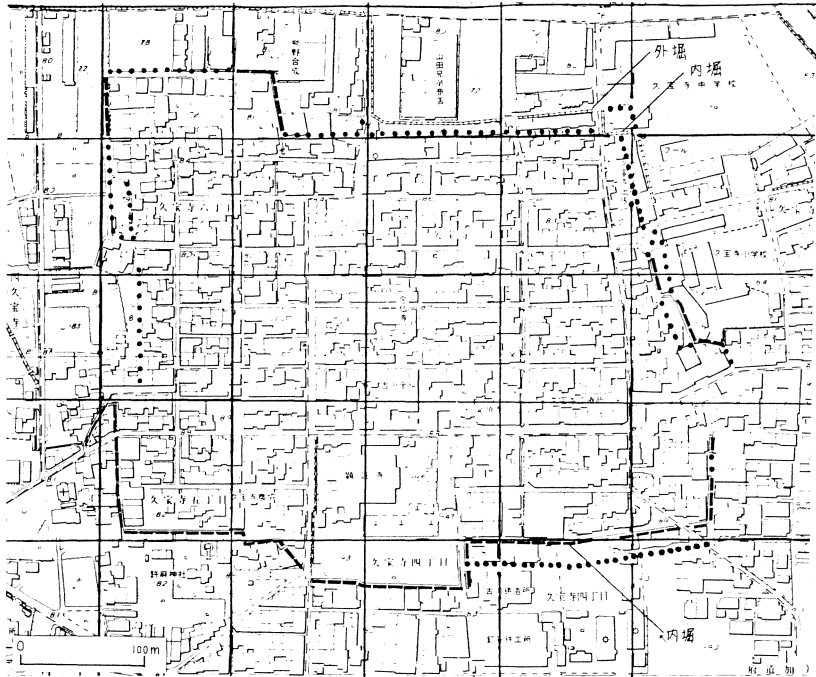


図1 久宝寺 ——— 残存濠…………… 推定濠

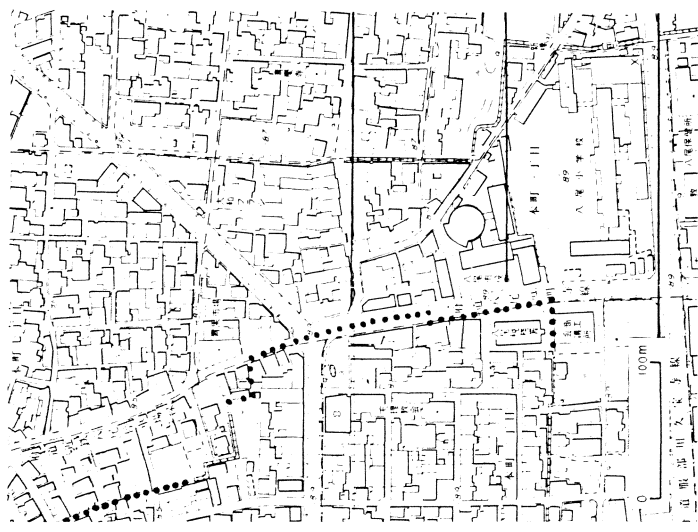


図2 八尾(東部のみ)…………… 推定濠 ——— 条理復原線

の微高地にあることが指摘できるが（土地条件図を参照されたい）、試行錯誤の上でなく、当初から意図的にその地を選定したことに注意する必要がある。真宗教団は土木技術についてかなりの知識があったと考えられ、低湿地の開発なども行なっている⁽⁶⁾。

さて寺内町は計画都市であるといわれる。しかれば計画の基準となったものがあるはずである。久宝寺寺内町の形態が条里制の影響を受けていることは既に指摘されており⁽⁷⁾、またこの地域の条里の復原図もいくつかあるが⁽⁸⁾、縮尺が小さすぎてミクロな考察は不可能である。そこで久宝寺について二千五百分の一の地形図をもとに条里の方眼をかけてみた。図1によると町の四周がほぼ条里の線上にのってくる。さらに町の北面と南面をみればわかるとおり、これは内堀の線と一致する。ただし道路は町中にひきこんだ際、入口の所でT字型に屈折させるため、内部の町割は条里の線とは別の基準で行なわれた。したがって町の建設プロセスとしては、①条里の線に沿って町の四面を決定する。②しかるのち内部の町割および外堀の建設を行なう、ということになろう。

萱振、八尾については久宝寺ほど、条里との関係が判然としない。萱振は町の東側に残存形態がみられるごとく、もともとは久宝寺と同じように二重の堀で囲まれていたのであろう。町の北側と南側の堀はそれぞれ条里の線より二分の一町ほど内に引き込まれているが、これが内堀であったとすれば、外堀は条里の線あたりを通っていた可能性もある。しかしこれは憶測の域を出ない。

八尾付近（図2）は市街地化が進んでいるため、条里の復原自体も困難である。町の東側にみられる条里の遺構の線⁽⁹⁾をそのまま西

に拡張してみたが、これとはズレがみられる。

三、町の内部構造

(1) 町割

次に町の内部のプランをみていくことにする。地籍図（図3・4）をみると萱振の場合はむしろ農村的な印象を受けるが、久宝寺、八尾は町屋的な形態を示している⁽¹⁰⁾。つまり一つのブロックが長方形を成し、各戸の奥行の二倍が一ブロックの短辺と等しい。家屋は一般に間口が狭く、奥行が深い型をとっている。これは近世城下町と同じ町割を成すものである⁽¹¹⁾。そして八尾の方がよりその形態が徹底しており、久宝寺は一概にそういえない面がところどころにみられる。また萱振が三つのうちでは最もブロックないしは家屋の規模のバラツキがあって統一のプランを見出し難いのに対し、久宝寺、八尾はかまりの統一がみられる。

以上のことを別の資料で補足しておこう。

元禄三年の「河内国若江郡村々高付家数人数寄帳⁽¹²⁾」によると、萱

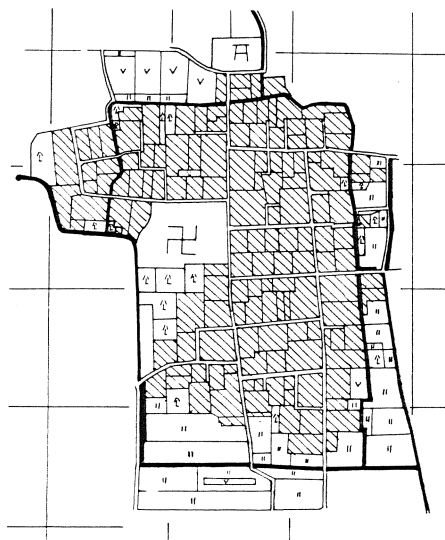


図3 萱振村地籍図および周辺の条里

振と八尾について次のような記述がみられる。

松平因幡守様御知行所

萱 振 村

一、高千三百四拾五石七斗七升

内

式拾三石七斗七升

高西夕雲御增高

一、家数貳百拾軒

内

百貳拾七軒 高持

八拾九軒 無高

一、人数九百七拾四人

内

四百七拾七人 男

五百三人 女

一、寺道場三軒

此人数拾七人

内

九人 男

貳人 女

人数合九百八拾五人

内

四百八拾八人 男

五百五人 女

小堀仁右衛門様御代官所

八尾庄 寺内村

一、古高六百貳拾五石九斗三升五合

内

拾九石七斗四升六合

高西夕雲御增高

外

七石五合

新田畑高

一、新高六百三拾八石五斗八升九合

一、家数五百六拾三軒

内

貳百五軒 高持

三百五拾八軒 無高

一、人数貳千拾六人

内

千拾八人 男

九百九拾八人 女

一、寺三軒

此人数三拾五人

内

貳拾七人 男

八人 女

人数合貳千五拾七人

内

千四拾五人 男

千六人 女

これによると人口では寺内村（八尾）が萱振の倍するのに対し、石高ではこの逆になっている。これは要するに八尾は人口集中が著

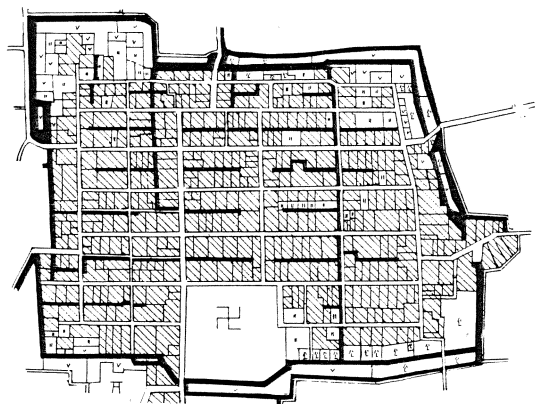
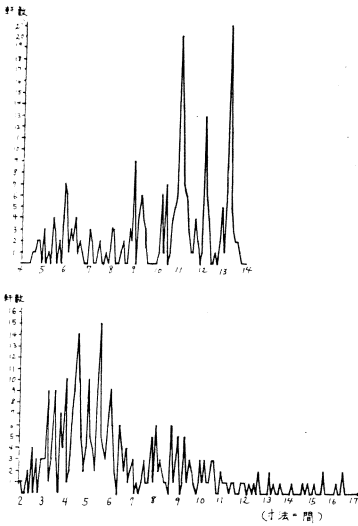


図4 久宝寺村地籍図

表1 久宝寺寺内町の家屋の規模
(上:奥行 下:間口)



しいが農家はあまり多くなく、逆に萱振は八尾に比べてはるかに農家が多かったことを物語るものである。

さて久宝寺については「河州許麻之莊久宝寺村全図」と記された一軒ごとの家屋の間口と奥行を記入した地図があり⁽¹³⁾、これを素材に家屋の規模の統計をとってみたのが表1である。これによると間口は三〜六間のものが多く、奥行は十一間、十二間、十三〜四間位に多くが集中していることがわかる。つまり奥行が間口のほぼ二倍程度となっている。頻度の高いのは間口については四・五間の十四軒、五・五間の十五軒といったところであり、一方奥行は十一間が二〇軒、十二・一間が十三軒、十三・二間が二十一軒あり、間口よりも特定のサイズに集中する傾向がある。これは間口の方が奥行よりも変化をうけやすいためであろう。久宝寺においても幕末に至るまでの間口の兼併、細分等を経てきているであろうから、例えば八〜九間のあたりにみられる第二のピークは四〜五間のものが二つ合わさったのだと考えられる。したがって当初は四〜五間×十一〜十

三間のあたりが家屋の基準サイズだったのであるまいか。

(2) 町のコミュニティ⁽¹⁴⁾

三つの寺内町のうち久宝寺(図5)は旧町名も比較的近年まで残り、町の改変も最小であるので、住民のコミュニティの考察には適している。そこで久宝寺を例にして町のコミュニティ単位について述べてみよう。

久宝寺(に限らず前出(1)で述べたような町割をとる町はすべてそのようだが)は町の両側をはさんで同じ町名が用いられる、いわゆる両側町の形態をとっていた。つまりブロックの中間、背合わせの家屋の間が町と町との境目となるのである。そして現在では用いられていない旧町名が今なお住民のコミュニティ単位を「規制」しており、町の自治組織(町内会)および地蔵堂の受け持ち区域にその反映がみられる。この二つは形態的にほぼ一致するため、ここでは後者のみに言及することとする。

町の内部には多くの地蔵堂があり、ことに各入口のところには必ず存在する⁽¹⁵⁾。これは久宝寺のみの特色ではなく、他の寺内町にもその例がある。真宗と地蔵信仰とは性質上結びつかないが、これはやはり真宗の、民間信仰を受け入れつつ発展していく性格の一つの表われといえよう。民間信仰の特色の一つとして現世利益的性格があげられるが⁽¹⁶⁾、地蔵信仰はまさにこれに該当する。

いくつかの地蔵堂について検討する。地蔵aは今口地蔵堂とよばれている。この地蔵の受け持ち区域が他とは異なっている点は、他の地蔵堂の場合、受け持ち区域内でさらにいくつかのグループに分かれており、一年おきに地蔵堂の世話係が交代するわけであるが、

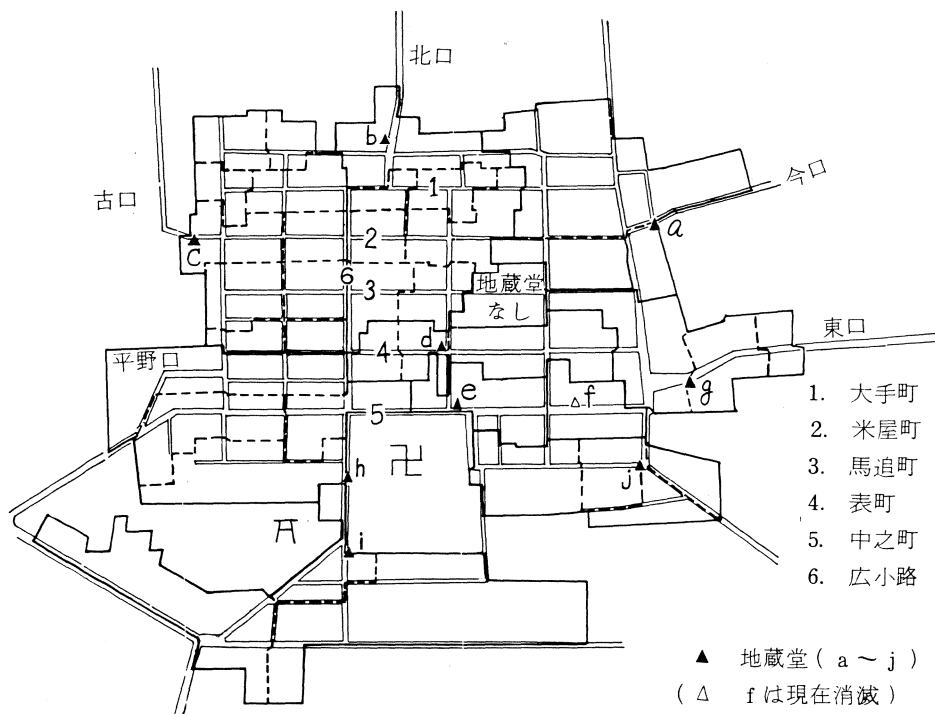


図5 久宝寺の町名、入口の名称と地藏堂の受け持ち区域

ここでは受け持ち区域の広さの割にグループが二つにしか分かれていない。この理由としてもこの地区の民家が少なかつたため二つにしか分かれておらず、その後増加したが区分けはそのままになったのではなからうか。地籍図をみれば北側のグループはかつて畑や田、竹林などになっていた部分が多い。この他目をひく点として、極めて近隣した地点にhとiの二つの地藏堂が存在する。iは許麻橋地藏とよばれ、許麻橋なる橋と隣接し、丁度町の南の入口にあたっている。疑問なのはhであるが、これは平野口のところにあったものを移動したのではないかと思われる。というのは平野口にも他の入口と同様に地藏堂があったと考えられるのであり、またこの地藏の受け持ち区域をみてもこの解釈は辻褄が合うからである。なお図中fの地藏堂は道路拡張工事の際撤去され、現在この地区の人々は地藏堂を持っていないが、こういうケースは他にもあったようである。というのは町の内部にどの地藏とも関係を持たない地区が存在している。その理由として、この地区にも地藏堂があったのが現在は消滅したと考えるのが自然であろう⁽¹⁷⁾。

次に、真宗寺院は市と係わりが深い⁽¹⁸⁾。寺内町においてもかつて市が立った、あるいは現在も立つところが多いのである。現在八尾ではお速夜市の名で市が開かれるが、これもともと久宝寺で開かれていた⁽¹⁹⁾ものが場所を移動したのである。昭和初期の文献によれば⁽²⁰⁾毎月十一日と二十七日に開かれる。とあるがこれは現在も変わっていない。ただ市がいつからはじまったのかはどうも判然としない。文政十年の明細書⁽²¹⁾に「当村往古は市場にて御座候」とあるが、あるいは戦国時代にその起源を求められるかもしれない。しか

し現在のものは幕末か明治の初年のころに始まったものようである⁽²²⁾。

(3) 寺内町における信仰の非単一性

地蔵の話がたので、ここで寺内町の中には他の種類の信仰がみられることを述べておきたい。

八尾寺内町の成立経過については一で述べたとおりであるが、実は久宝寺の中には八尾御坊大信寺その他、八尾にある東本願寺系の寺院の壇家が相当数存在し、多少の住民の移動を考慮に入れても説明がつきにくい。また同町には融通念仏宗の寺、念仏寺もある。

萱振御坊恵光寺は西本願寺派であるが同町には徳蔵寺という東本願寺派の寺もあり、この壇家もかなりある。寺内町の宗教的機能については厳密に考えすぎると問題がある、と脇田修氏は述べているが⁽²³⁾、少くとも近世後期においては宗教上の色わけはほとんど無意味になっていたのであろう。それはひいては御坊というものの地位が形骸化したことを示しているのである。



さらにもう一点注意したいのは、寺内町に隣接して神社が存在することである。そしてこれらの神社は町の防御上重要と思われる地点に位置していることは、現在の地図からみても了解される。つまり萱振は町の南北を貫く道がいわば、「メイン・ストリート」にあたるわけだが、その北の入口のところに加津良神社が存在する。久宝寺の場合は南の入口のところに許麻神社があるが、この入口は南北に走る広小路の南端にあたる。またこの両神社とも、式内社で格式は高い。八尾にも大信寺の北隣りに八尾天満宮が存在する。これは八尾寺内町の鎮守で慶長年間、片桐且元の造営と伝えられる⁽²⁴⁾。






































ただしこの神社は前の二つと違って環濠の内側にある。このように神社は城下町における寺町のような意味を持っていた⁽²⁵⁾。

四、町の構成員

次に寺内町の構成員の由来を探ってみよう。筆者はこれを屋号の調査によって明らかにしようとした。屋号は現在でも古老からの聞きとりによってある程度を知ることができるが、ここでは文献資料(ないしは古地図)を用いている。とはいえ資料の種類も時代も同質のものではなく、比較するには無理な面もあるが、大体の傾向を知るには足るであろう。

(a) 久宝寺 顕証寺所蔵過去帳(表2)によって久宝寺の住民のうち、その壇家については屋号を明らかにすることができる。ただ残念なのは記載がほぼ江戸中期以降からはじまっており、それ以前についてのものがない。地名は正確な地点がわからないものもあるが、そ

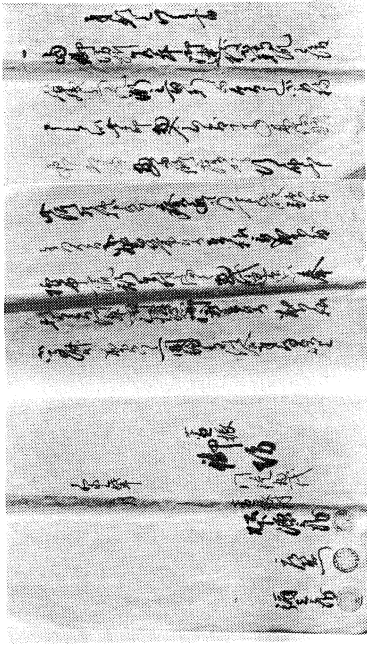
表2 顕証寺過去帳記載の屋号
(イロハ順、…地名、…職業)

五十嵐屋	鳳井屋	寺井屋	屋屋屋
 六反屋	 亀田屋	 天王屋	 油孫屋
 花摩屋	 丹煙屋	 我阿屋	 酒防屋
 播井屋	 樽置屋	 酒精屋	 喜連屋
 豆尾屋	 谷筒屋	 喜木屋	 之本屋
 大堀屋	 中梅屋	 由味屋	 削噲屋
 大坂屋	 植松屋	 味塩屋	 川鳴屋
 大蓮屋	 磨白屋	 地波屋	 下酢屋
 綿角屋	 大和屋	 地波屋	 下酢屋
 川形屋	 五米屋		
 川鋸屋	 立神屋		
 河内屋			

のほとんどは近隣農村のものである。なおこれによって住民の職業もある程度わかるが、職業構成を示す資料としては前出の文政十年の明細書⁽²⁶⁾の方がより確かであろう。

(b) 萱振 恵光寺には「奉願上口上書」と記された嘉永三年の文書が残されている(写真)。その内容は寺の荒廃、即ち物盗りが入り、また借財が積もって修復も思うにまかせず、このままでは廃寺のおそれがあることを述べ、「御本山(西本願寺のことか)御役人中様」あてに助けを求めた文書の写しである。そして文面のあとに門徒の代表者の名が連記されているが、その形式は最初に村名、次に代表者名を書いて印を押す、という形をとっており、これによって門徒の分布が知れる。近隣農村の地名が多いのは(表3)久宝寺と同様である。また両方共に言えることであるが、特に一定の地域から集中するということはなく、比較的周辺部に均等に分布している感じを受ける⁽²⁷⁾。

書文恵光寺写真



(c) 八尾 京大地理学教室に所属されている「八尾郷絵図」(図6)に

は一軒ごとの屋号が記入されており⁽²⁸⁾、これから住民の職業構成、および出身地をある程度推量することができる。表4によれば相当広範囲にわたる職種がみられるが、生活必需品の他、消費あるいは娯楽を目的とする職が多くあり、典型的な在郷町といつてよからう。地名については久宝寺や萱振と同様、周辺農村部のもものかなりみられるが、前二者と違って都市的集落のものがかなりあるのが注意をひく。即ち平野、久宝寺、柏原といった在郷町、さらに京、堺といった地名がみえる点である。また同じ屋号を用いている家が何軒もみられる。勿論屋号がそのまま出身地を示すものであるのかどうかは即断できないが、その可能性は高い。そしてこういった人々は当初から商業を目的として流入したとみられ、そのことが八尾の都市的性格とも結びつく。

要するに(これだけの資料であまり断定的なことは言えないにせよ)次のように言いうるのではないか。つまり久宝寺、萱振は周辺農村にとって中心地的色彩が強かったのに対し、八尾はその機能に加え、さらに商業的機能が強化されていた、と。

表3 恵光寺文書にみえる地名

寺路園田	走走殿?	家田市江郡家井摺田寺持川
万小	良水	新 蔚 若 新 郡 覚
福横花吉	古町箱宝額布上西西大	衣柏正宝荒
振郷太内部井堂反松川原	て田田座宮寺内郷野寺	
萱西穴寺跡亀太六植洪長西坂太八別成庄東中万	子 なわ 尾 法之 願	

表4 八尾郷絵図記載の屋号
(数字は軒数)

地名		職業								
平野屋	8	か	し	や	1	も	め	ん	や	4
小山屋	15	あ	め	や	1	古	手	屋	3	
天王寺屋	1	大		工	4	か	さ	や	2	
大和屋	3	か	す	屋	3	目	薬	屋	3	
久宝寺屋	7	紙		屋	9	こ	ま	もの	や	1
きのくに屋	3	か	わ	ら	2	た	は	こ	や	1
京屋	2	も	ち	屋	2	か	き	や	や	1
堺屋	7	こ	う	し	4	か	み	そ	や	2
弓削屋	6	油		屋	4	は	と	り	や	3
八尾木屋	1	は	た	や	1	と	む	し	ろ	1
百済屋	2	か	な	べ	1	と	あ	か	ね	2
柏原屋	3	か	な	べ	1	と	あ	か	ね	1
木本屋	1	か	米	ち	5	古	紺	物	屋	1
関東屋	2	米	ち	や	2	紺	樽	屋	1	
池島屋	1	ち	お	や	1	樽	わ	た	1	
吉田屋	1	塩		屋	2	わ		た	1	

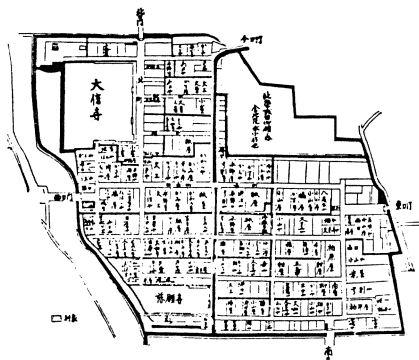


図6 八尾郷絵図(西川幸治著による)

諸研究 (とい) 地理学 からの アプロ ーチは いく少 (ない) ではない) 充分に

五、結び
以上羅列的に述べてきたが、簡単に要約をしておくことにする。
一口に寺内町といっても実際には様々な性格のものを含んでいる。中世成立の寺内町と近世成立のそれとは町の成立の契機自体が異なるし、時期的に同じころできた町でもその後の変遷過程は一樣ではない。従来の

表5 三寺町内のまとめ

町名	時代および位置		発生時の格	形態		住民		近世以後の容
	成立期	位置		町割	防御性	住民構成	市	
久宝寺	中世	自 然 堤防上	城塞都市	都市的	大	主に周辺農村出身者	あり	はじめに在野発展、退
萱振	中世	自 然 堤防上	城塞都市	農村的	大	主に周辺農村出身者	確認できず	衰退もしくは停滞
八尾	近世	自 然 堤防上	在郷町的	都市的	小	周辺農村+他の都市からの流入	あり	在郷町として発展

明らかにならぬ。そこで筆者は近隣しあう三つの寺内町を比較して、それらの間の性格の差異を明らかにしたいと思ったわけである。勿論寺内町相互に共通点がみられることは当然であるが、ここではむしろ相違点の方を強調している。既往の研究成果や文献資料を町の景観と対比させつつ、その相違を考察してみたのである。
一般に中世都市から近世都市への変容点として、前者が無計画であるのに対し、後者のかなり整然とした計画的都市秩序を持つに至ることが指摘される⁽²⁹⁾。これをそのまま適応すると萱振が中世的、八尾が最も近世的であることになる。ただここで問題になるのは現景観、ないしは地籍図などにみられる町の形態をどの程度まで往時の形態として遡及させうるか、ということである。人為的改造は勿論であるが、寺内町に限らず我が国の都市は火災が多く、少くとも火災の記事の残っている町については「景観の保存性」を疑う必要がある。また富田林、今井などは家屋構造から町並の変遷過程が明らかにされているが、この三つの寺内町についてはそれも困難である。ただ次のことは言えよう。

明らかにならぬ。そこで筆者は近隣しあう三つの寺内町を比較して、それらの間の性格の差異を明らかにしたいと思ったわけである。勿論寺内町相互に共通点がみられることは当然であるが、ここではむしろ相違点の方を強調している。既往の研究成果や文献資料を町の景観と対比させつつ、その相違を考察してみたのである。
一般に中世都市から近世都市への変容点として、前者が無計画であるのに対し、後者のかなり整然とした計画的都市秩序を持つに至ることが指摘される⁽²⁹⁾。これをそのまま適応すると萱振が中世的、八尾が最も近世的であることになる。ただここで問題になるのは現景観、ないしは地籍図などにみられる町の形態をどの程度まで往時の形態として遡及させうるか、ということである。人為的改造は勿論であるが、寺内町に限らず我が国の都市は火災が多く、少くとも火災の記事の残っている町については「景観の保存性」を疑う必要がある。また富田林、今井などは家屋構造から町並の変遷過程が明らかにされているが、この三つの寺内町についてはそれも困難である。ただ次のことは言えよう。

久宝寺、八尾が近世前期に在郷町として成立していたことは既に歴史学の諸成果が明らかにしているが⁽³⁰⁾、萱振は町割や文献資料

(三の(1)参照)で考察したごとく、都市としての発展はなかったと考えられる。一旦は在郷町として繁栄の道を歩んだ久宝寺が、その後衰退することも初めの方で述べたとおりである。これは町の人口変動についても言えるし⁽³¹⁾、地籍図にみられる町中の団地、畑地も人口集中度が高くなかったことを示している。このように三つの寺内町はそれぞれ異なった経過をたどってきたと言える(表5)。

「寺内町」という言葉は従来かなり曖昧な使われ方をしてきたように思われる。今後は個々の事例研究の深化とともに寺内町相互の比較が必要であろう。本稿はそれに向けての一つの試みである。

(大阪大学・院生)

注

- (1) 藤岡謙二郎「寺内町の性格」人文地理 一一 一九四八
- (2) 藤岡謙二郎『先史地域及び都市域の研究』柳原書店
一九五五 三五四～五頁 藤岡氏は久宝寺と八尾の二つをあげているが、萱振も恵光寺(真宗)を中心に形成された寺内町である。
- (3) 沢井浩三「寺内町の形成とその性格―久宝寺と八尾―」『八尾市史』一九五八の寺内町に関する部分など。本稿は沢井氏の研究を補足するものであり、また従来の研究で久宝寺、八尾寺内町に言及する際にはみな沢井氏が公にされた

資料を使っているもので、それ以外の資料ないしは事実を提供するという意味もある。

- (4) 久宝寺御坊顕証寺はもと西証寺と称し、蓮如二十一男実順が開基。また萱振は同じく八男蓮淳が開基とされる。
- (5) それぞれ久宝寺城、萱振城という城が存在し、城下町といってもよい面を持っていた。
- (6) 鈴木良一「戦国の争乱」『岩波講座日本歴史8・中世4』一九六三 二〇～二一頁。
- (7) 前掲(2)、(3)
- (8) 由井喜太郎「河内国条里の研究」ヒストリア十三 一九五五、棚橋利光『八尾の条里制』(八尾市史紀要第六号)一九七六。
- (9) この部分の条里は服部昌之「古代の直線国境について」『政治区画の歴史地理』(歴史地理学紀要17) 一九七五 一一頁の図による。
- (10) 八尾については後掲の図6、八尾郷絵図を参照されたい。
- (11) 矢守一彦『都市プランの研究』大明堂 一九七〇 三〇八頁以下。
- (12) 『河内史談第四輯』東大阪新聞社 一九五四 一七六～一九三頁に収録。
- (13) 久宝寺に在住していた郷土史家、坂本氏の作製になるもので図面には次のような注釈がある。(本人は既に故人)此図面者安政万延年間ヨリ元治慶応及び明治初年に致ル調査ニ拠ル作品ニ而祖父吉兵衛之蔵セルモノ成リシガ紙質

毀損汚斑シテ義理分明成リ難ク煙滅セン事ヲ患ヒ原図ニ順拠シ是ヲ作製ス図中林野開墾シテ耕地ト為リ畑変リ而田ト成リ地目変換其他建築物之改造ニ於ル等旧観ヲ新タニ為スト雖モ土地大体之位置ハ現今ニ及ブモ異ル事ノ有ンヤ

大正四年乙 初夏作 印

- (14) 寺内町の内部はさらにいくつかのコミュニティ単位（主なもの「町」）に分かれているが、これらはすべて同質のものではなく、何らかの性格の相違があったようである。たゞそのことに言及した研究はごく少なく、管見の範囲では橋詰茂「寺内町今井について」『日本文化の社会的基盤』 雄山閣一九七六 一八二―一八九頁に屋敷地の所有は後から形成された町の方が旧町よりも分散化の傾向が強い（Ⅱ階層の分化の進展）ことが述べられているのを知るだけである。第一に旧町名の範囲もはっきりとはわからない場合が多い。今井の場合は町ごとに色わけした古図があるが、他にこんなケースは滅多にない。そこでまずコミュニティ単位の復原から始めることが必要であろう。ただしここでは町のコミュニティ単位を図化、解釈しているにすぎず、それらの間の非均等性を明らかにするものではない。
- (15) 平野口のところだけがない。
- (16) 桜井徳太郎『日本民間信仰論』 弘文堂 一九七〇 二二三―二四頁。
- (17) 安田覚三郎『久宝寺村誌』 久宝寺村役場 一九二八 八六頁には「本村に地藏堂十五宇あり」と記されているが、

現在九ヶ所しかみられない。

- (18) 後藤文利『真宗と資本主義』 所書店 一九七三 九五―一〇〇頁。
- (19) 顕証寺の門前から、八尾に至る道路沿いに長瀬川（旧大和川）付近まで開かれていた（聞きとりによる）。
- (20) 前掲（17）中の「年中行事」（九〇―九七頁）
- (21) 「文政十年久宝寺村明細書写」『八尾市史 史料編』 一九六〇。
- (22) 沢井浩三「中河内の中心『久宝寺発展史』」 前掲（12） 一三七―一四〇頁。
- (23) 脇田修「尼崎地域と寺内町」 地域史研究七―一 一九七七 一七頁。
- (24) 『八尾の史跡第5集』 八尾市 一九六七 二〇頁。
- (25) 貝塚についても同様の事実が指摘できる。貝塚寺内の東は角が防御という点では最も弱いところである。『貝塚寺内町』貝塚市教育委員会 一九七九 には「この感田神社は東方面における軍事的役割をもつ出城的なものであることがうかがわれる。」とある（同書二三頁）。
- (26) 前掲（21）
- (27) 地名の現地比定には主に明治時代の陸地測量部による地形図を用いた。
- (28) 西川幸治『日本都市史研究』 日本放送出版協会 一九七二 一五一頁。

(29)

原田伴彦「中世都市から近世都市へ―その景観的変容」
人文地理 八―六 一九五七。

(30)

例えば脇田修「近世前期先進地域における都市と商品流通―在郷町を中心にして―」歴史学研究 二二九号 一九五九
大和川付け替えのあった宝永年間には戸数八二〇余軒、人

付記：成稿にあたっては矢守一彦先生はじめ、多くの方々から御教示を賜りました。厚くお礼申し上げます。
口三千余人であったが、約五〇年後の明和元年には戸数七〇九軒、人口二八二一人となり、その六〇年後の文政六年には戸数四九七軒、人口二二五一人に激減した(八尾市史一七三頁)。

(31)

A Historico-Geographical Study of Jinaicho in yao (Osaka Pref.)

Toshi Kanai

There are three jinaichos in Yao City; Kyuhoji, Kayahuri and Yao. These Towns are the "historical cores" of the present Yao City. This paper is intended to show the characteristics of the jinaicho, including its similarities and differences, from the viewpoint of historical geography. The contents are as follows,

1. Purpose of this study and the outlines of three jinaichos: Kyuhoji and Kayahuri were established at the end of the 15th century (Muromachi Era), while Yao, early in the 17th century (Edo Era), and after that each of these towns followed its own course respectively.
2. The location of towns and Jori system: Three towns are located on natural levees, which was given by nature. Next, the form of a jinaicho is regulated by Jori system in many cases. The rule applies most clearly to Kyuhoji.
3. The Structure of the towns: I approach this subject from these three points. (1) The division of land; As for the way of dividing land in a block, Kyuhoji and Yao are "urban" while Kayahuri is rather "rural". (2) The Community in jinaicho: The community unit and the periodical market of Kyuhoji are analyzed here. (3) The variety of religions in jinaicho: Not only Shinshu but also other religions exist in jinaicho.
4. Members of Towns: The documents and the old maps can show us to some extent where the inhabitants of jinaicho came from and what occupations they followed.
5. Conclusion: The summary of 1 to 4 and prospect

It is difficult to define the term jinaicho because it has many concepts. So, I'd like to suggest that comparative study of some jinaichos should be needed. The Study will help us to make its characteristics clearer. This paper is a kind of practice of this suggestion.